

美人リーマンシリーズ3

美人リーマン刻まれた背徳の契印

——艶辱の檻に翻弄されて——

R18

\*\*\*\*\*

翔は白い封筒を、無言のままデスクの上へと差し出した。

「辞表」の文字を視界に入れたまま、男の唇の端が、かすかに持ち上がる。

——だが、封筒そのものに、改めて目を向けることはなかった。

黒檀のデスクに置かれた真鍮のプレートには『EXECUTIVE OFFICER TOGO』の刻印。

社内では一様に「本部長」と呼ばれている男だが、その実態は経営の中枢に位置する執行役員であることを、この重厚なプレートが、揺るぎない地位を無言で証明していた。

仕立てのいいスーツは、この場で己を誇示する必要がないことを、静かに物語っている。

「……唐突ですね」

間を置いて落ちた声とともに、視線が静かに翔へ向けられる。

穏やかなはずの眼差しに、一瞬で縫い止められた。

——視線が外せない。

絡め取られてしまった感覚に、かすかな恐怖を覚えた。

——空間そのものが、この男に支配されているようだった。

室内には、必要なものだけが無機質に置かれている。

「どうしました。そんな顔をして」

その一言で、翔の心臓が強く脈を打った。

一拍一拍が、やけに重い。

「神谷くん……困りましたね。君ほどの人材を、そう簡単に手放すわけにはいかない」

「ありがとうございます。……ですが、もう決めたことです」

微かに揺れる声の奥に、確かな意志があった。

翔の瞳は、静かに決別を告げている。

「原因は、黒田さんかな」

沈黙がしばらく続いたあと、目の前の男——東郷は、意外な名前を口にした。

「……え？」

思わず声が零れ、肌が粟立つ。

なぜ、この場でその名が出る。

心臓が、痛いほど跳ねた。

東郷は、そんな翔の反応をしばらく眺めてから言った。

「その顔は、凶星ですね」

そう言っつて、スマホをゆっくりと取り出す。

画面が静かに翔の方へ向けられた。

「……………！」

頭を殴られたような衝撃が走る。

翔は反射的に視線を逸らした。

「……………なぜ、それを本部長が」

拳が、わずかに震える。

「黒田さんとの商談をセッティングしたのは、私です」

口調は、あくまで穏やかだった。

「熱心に頼まれてね。よほど君がお気に入りらしい」

スマホから、微かに音が漏れる。

「動画を送ってもらいました。彼は少し渋っていたけれど、『これから先、もっと自由に君を可愛がれる場所を用意する』と約束したら、喜んでこれを差し出してくれましたよ」

東郷の穏やかなその声とは反して、苦しげな……それでいて甘い掠れた吐息と、欲を孕んだ男のくぐもった笑い声、そして湿った粘膜が擦れる音がそこから聞こえてきた。

翔は、耳を塞ぎたくなる衝動を、必死で堪える。

不意に、脳裏へ滲み出す、押し込めたはずの、あの夜の——屈辱。

思い出したのではない。

まだ、消えていなかっただけだ。

部屋に滲む微かな音だけが、静謐な執務室に不釣り合いな艶めかしさを孕んで響く。

自分のものとは思えない、情けないほどに乱れた吐息が、東郷の指先から零れ落ちていく。

逃げ道が塞がれたと、頭より先に身体が理解してしまった。

翔がその沈黙に囚われたまま立ち尽くしていると、東郷が静かに口を開いた。

「よく撮れてますね、神谷くんの可愛く乱れる姿が」

東郷は表示を切り替えることもなく、動画に目を注いでいた。

それがかえって羞恥を煽る。

「……普段の君からは想像もつかないほど、艶めいた肢体を晒して」

画面の向こう、黒田の指先に弄ばれる翔は、剥き出しにされた自己を懸命に隠そうとするかのように、ただ悩ましく揺れていた。

「これほど甘美な絶望を隠し持っていたとは……。君に対する認識を、改める必要があるそう  
だ」

東郷は静かに呟いた。

それは称賛にも似ていたが、温度はなかった。

快楽に引き摺り込まれた——あの夜の声。

目を閉じて、自分の熱を孕んだ声が耳から脳を犯していく。

「会社を辞めたところで、どうしようもないと思いませんか？」

逃げ場を失い、縋るように壁へ背を預ける翔に、東郷の抑えた声が追い打ちをかける。

「黒田さんも——随分と君に入れ込んでいますからね」

東郷は、手元に視線を落としたまま淡々と告げた。

「君も随分と悦んでいたように見えますが？」

翔の内側で、何かが静かに凝固していく。

この状況に囚われたまま、何も意思を示していない——その事実気づき、翔は遅れて激しく首を振る。

「やめてください、それは……変な薬で……！」

慌てて否定するが、東郷は冷ややかな声で応じる。

必死に紡いだ拒絶を、冷徹な一喝で踏み躪った。

「……それを、誰にどう説明するつもりですか？」

「え……？」

その言葉に、翔は耳を疑う。

「この動画を見せて回る相手全員に、いちいち弁明するのですか？『これは薬のせいです、本意ではありません』と。……そんな滑稽な言い訳を信じる人間が、この世に一人でもいると思いますか？」

「そ、それは、どういう意味……？」

問いかけた瞬間、翔は息を呑んだ。目が大きく見開かれる。

まるで未来予想図を淡々と読み上げるような、冷ややかな口調。

翔の胸の奥に、じわりと、刺すような戦慄が広がっていく。

「そういう意味ですよ。……黒田さんだけが“特別”なんて、他のクライアントに申し訳ないと思いますか？」

東郷の指が、スマホの画面を軽く弾く。

扱いを決める前の、確認のように。



翔の瞳が震える。

自分の体が、どんなふうに映っているのか、考えるのも怖かった。

黒田の声が、飛び込んできた。

「翔くん……?! なんや、東郷さん、どういうことや!」

一瞬の沈黙のあと――。

東郷はゆっくりと笑い、言った。

「貴方と同じことをしてるんですよ、ああ…彼の中はとても気持ちがいい……私をきつく締め付けて離さない」

腰を深く打ちつけながら、余裕たつぷりに続ける。

「いかがですか？ 貴方にも同じように、こんなに可愛く媚びていたのですか？」

映し出される、東郷を受け入れている熱く蕩けた入口がその動きに合わせて、まるで個別の生き物のように蠢いた。

「あの動画を拝見して、少々興味を引かれまして……、本当に咽ぶような艶を放つ」

東郷は片手で翔の腰を強く引き寄せ、繋がった場所をカメラに晒すように角度を変えた。

ぱちゅっ……じゅぷっ……ずぷっ！

白く泡立った蜜が、激しい抽挿のたびに溢れ、太ももを伝って淫らな雫となって滴り落ちていく。

「あ……っ、んんっ………！ やめ……っ………！」

翔は必死に声を殺そうとするが、東郷の肉棒が最奥の弱い部分を抉るたび、甘く裏返った嬌声が零れ落ちてしまう。

「こんなにも扇情的なのに……」

その声音には、感情の欠片もなかった。

「その強さだけは、少しも崩れない」

一瞬の沈黙。

東郷は口元をゆるめ、静かに笑う。

空気がびたりと張りつめる。

だが次の瞬間、その瞳に愉悅が滲んだ――。

まるで感動的な映画でも見たかのような口調だった。

「本当に背徳感の塊ですよ、神谷くんは」

東郷の声は冷たく澄んでいて、それがまるで氷の刃のように、翔の残されたプライドをゆつくりと切り裂いていく。

スマホの向こうで、黒田が息を飲む気配がした。

東郷は満足そうに唇を歪めながら、翔の耳元で甘く、しかし、はっきりとした声で囁いた。

「ほら、黒田さんに聞こえるように……ちゃんと啼いてごらん？」

腰を強く、深く打ちつけ、翔の最も敏感な場所を執拗に嬲り続ける。

「はぁんっ……！ あっ、あぁっ……！」

翔は涙を零しながら、黒田の視線の前で、無様に、淫らに、啼かされ続けていた。

「黒田さん、誤解されているようですが――神谷は“あなた専属”ではありませんよ」

通話越しに放たれた言葉は、穏やかで酷く空虚だった。

「あれは、あくまで“接待”の一環です。その場限りの、ね」

東郷はそこで言葉を切ると、手の中で躍るスマホのカメラを、微調整するようにわずかに傾けた。

画面の向こうで、凍りついているであろう相手の動揺を、楽しむことさえしない事務的な手つき。

「いかがですか？——久しぶりの神谷は」

ふ、と口角だけで微笑む。その視線は、己の腕の中で浅い呼吸を繰り返す獲物へと落とされた。

「もちろん、次のセッティングもこちらで手配いたします。ああ、ただ……」

一度言葉を切り、男は翔の濡れた項を、まるで資料の紙端でもなぞるように冷ややかな指先で辿った。

「他のお客様との兼ね合いもございますので、スケジュールは改めて調整させていただきます」

翔の耳が、その言葉を拒絶するように震えた。

——他の接待……？

事務的な響きが、翔の思考を汚すように入り込む。

「待て……っ。他にも相手させるいうことか？」

黒田の怒号が、翔の心に芽生えた不穏な予兆を無慈悲に確定させた。

その声で、胸の奥の嫌な予感がはつきりと形を持った。

動画を撮るだけでは済まされない。

分かっていたはずなのに、言葉にされた瞬間、胸の奥が沈んだ。

自分の知らないところで、自分の身体が、予定表に組み込まれている。

恐怖と屈辱に、足元が崩れ落ちそうだった。

動揺する二人をよそに、東郷は淡々と続けた。

同じ場所にいながら、彼だけが別の理に立っている。

「……もう少し、ご覧になりますか？」

黒田の問いを、斜に払い落とすように遮る。

スマホが、翔の顔の前に差し出された。

その中には、己の姿。潤んだ瞳と、喘ぎを堪えきれず震える唇。

あの黒田の目の前で、無様なまでに晒されている。

「っ……やめ……っ」

震える声が、僅かに漏れた——その瞬間。

東郷の動きが変わった。

淡々としていた所作に、急かすような抑揚が混じり始める。

「ッ……あ、あ……っ、だ……めっ」

翔の顔が火照り、唇が薄く開いて、吐息に震える。

羞恥が、快感にかたちを変えていく。

画面越しに黒田の視線を感じながら、翔の肌はより艶を帯び、  
“乱れた顔”を他人に見せる悦

びと絶望が、音もなく浮かび上がった。

「ほら、神谷くん、こんなにも……悦びを滲ませて。もう隠しきれていない。あなたが好きだった顔でしょう？」

落とされた一言に、翔の目が微かに揺れる。

スマホから、黒田が息を呑む気配が伝わった。

そこに映った自分の顔——紅潮し、濡れた瞳で何かを堪えるように見つめる艶態に、翔は戦慄した。

東郷は、あえてゆつくりと画面を下へと滑らせる。

繋がった部分を晒し、ゆつくりと抽挿してみせる。

淫靡な湿った音と、東郷を飲み込んでいく翔の中と、ゆつくりと、それでいて確実に奪うように穿つ槌が、しっかりとフォーカスされる。

黒田がつけた痕をかき消すように、上書きするように。  
明らかなマウント行為だった。

「や……っ、撮らないで……っ、本部長……っ」

「そんな声は、黒田さんをますます煽りますよ、神谷くん」

低く艶を帯びた声が、静かに響いた。

翔の背中がわずかに弧を描く。

「あなたが男に媚びるように開発した神谷の身体……想像以上に仕上がっていますよ。たっぷりと堪能させていただきます」

東郷はわざとゆっくりと翔の中を掻き回すように、腰を動かした。

「次にそちらにお伺いする時には、もっと……黒田さんが楽しめるように、しっかりと教育しておきます……失礼のないようにね」

「や……、もう……やめて……っ」

翔の意識がうわごとのように掠れた声を滲ませる。

「ふふ、抵抗も欲を煽るだけですよ……」

東郷が愉悅のままに息を吐く。

翔の中に、熱がじわりと滲み出すように溢れた。



「あ……だめだ……今は……」

声にならない声が、喉の奥でかすれた。

波打つ感覚が、奥底からこみ上げてくる。

理性が押し戻そうとしても、鼓動が先に昂ぶってしまう。

汗にまみれ、涙でぐちゃぐちゃになりながら「解体」されていく傍らで、東郷はその髪も服も乱すことなく、淡々と、しかし執拗に翔を翻弄し続ける。

激しく揺さぶられる獲物とは対照的に、彼はどこまでも静かな佇まいのままだった。

こんな状況で……黒田の前で……！

翔は、自分の身体を呪った。

恥辱と羞恥、そして抗えない疼きが絡まり合い、全身の神経を焼き尽くしていく。

東郷の手が腰を捉えた。

「ああ……いいよ、そのまま」

低く濡れた声が、すぐ背後で落ちる。

画面越しの黒田に対する、明らかな当てこすり。それは翔を慈しむためのものではなく、二人の男の優劣を決定づけるための残酷な演出だった。

けれども、一気に熱が昂まる。

翔の瞳が揺れ、喉がひくりと震えた。

画面越しの黒田は、最初こそ驚愕に目を見張っていたが、やがてその目に異様な熱を宿しはじめた。

「見てる……」

翔はぞっとする。

嫉妬で顔を歪めながらも、視線は釘付けだった。

奪われたくないという焦燥と、どうしようもない昂ぶり――。

それは、翔のすべてを暴くように、ただ見つめ続けていた。

「今日はあの可愛らしい関西の言葉は出ないのかな？ 黒田さんの時だけですか？ 妬けますね……好きなんですけどね、神谷くんの関西弁」

東郷はさほど気にしていない様子で声を上げずに静かに笑った。

「神谷くんはね、ようやく言葉を覚えた獣のようだ。……ご覧なさい、ちゃんと教えれば、ほら——こんなに素直に悦ぶようになる」

東郷の声は静かに微笑を含みながらも、翔の背に這わせる手つきは、獲物の癖を確かめる飼い主のそれだった。

「ご安心を。黒田さんが飽きないように、しっかりと仕込んでおきますよ」

翔の中を波打つ屈辱と羞恥。

だがそれ以上に、“それでも心までは支配されない”と、最後の矜持を必死に掴み取っていた。

「本当に可愛いね、君は……独り占めしたくなるよ……」

甘く囁きながらも、東郷の視線は、据え付けられたカメラのレンズを真っ向から捉えていた。

「独り占め」という言葉が、画面の向こうで歯噛みしているであろう男をどれほど狂わせるか。

その反応を正確に予測し、慈悲もなく煽り立てる。

「おや？ 貴方に見られて反応しているようだ」

東郷はこの場でただひとりだけが明らかに楽しんでいた。

揶揄うように笑う違和感。

「神谷くん、少しわきまえなさい」

ため息まじりに微笑む。

まるで、困った子を愛しげに諭すように――だが、その目には愉悅の色が宿っていた。

翔は首を横に振って身体の昂りを誤魔化すのに必死だった。ダメだ、黒田の前でこんな……。

東郷は目を細めてその様子を伺う。

「仕方ないな、じゃあ、黒田様の前で熱を解放しようか」

「……！……やっ……て違う……っ」

グリ、と分かっているかのように翔の中の上の方を擦り上げた。

「ああ……っそこ……っダメ……っ、あっ……ああ……」

さらに執拗にピンポイントで責め立ててくる。

一切の迷いが無いそれは、最も抗えない場所を正確に抉り抜いていく。

※本作品はフィクションです。  
実在の人物・団体とは関係ありません。  
未成年の閲覧・購入は禁止します